

造のいう「BUSHIDO」(智・仁・勇)の精神を体現しつづけた」と強調し、武士道の精神を通して医療人の一生を貫いた関場不二彦を著者は語ろうとしたのではなかろうか。ぜひ一読をお願いしたい。

(島田 保久)

[北海道出版企画センター、〒001-0018 札幌市北区北18条西6丁目2-47, TEL. 011(737)1755, 2011年3月, 四六判, 289頁, 2,000円+税]

荒井保男 著

『日本近代医学の^{あけぼの}黎明——横浜医療事始め——』

安政4(1858)年に日米修好通商条約が締結され、同様の条約がイギリス・フランス・オランダ・ロシアとも締結されたことによって、横浜・箱館・新潟・神戸・長崎の五港が開港されることとなった。翌安政5年には、横浜をはじめとした港に多くの外国人たちが訪れ、諸外国の新しい文化を広めていったのである。

2009年は横浜開港150周年ということもあり、各地で記念行事が催されたことも記憶に新しい。本書も横浜市立大学医学部における横浜開港150周年記念講演での著者の講演をもとに企画されたものであるという。

本書の著者である荒井保男氏は、横浜における医史学の第一人者であり特に横浜の医療とD.B.シモンズに関する研究については数々の論文や学会発表、著作が残されている。荒井氏の緻密な史料収集と分析によって、シモンズについての知られざる部分が次々を明らかにされたことは、医史学会会員の方々のご記憶に残っていると思う。

本書では、日本が開国してすぐに開かれた港を持ち江戸に近い土地柄の横浜に、幕末から明治初期に海外から様々な新しいものがもたらされたことに注目して、IからVIIまで7章が組み立てられている。

本書で取り上げられている話題について少し触れておきたい。近代西洋医学事始めとしてはJ.C.ヘボンを取り上げ、近代外科学のはじめでは横浜軍陣病院とW.ウィリスについて書かれている。IV章の横浜医療とシモンズでは、シモンズがどれほど横浜の医療に貢献したかが著者の収集した豊富な史料や参考文献を元に書かれており、今さらながらシモンズの功績を実感させられる。

上記の章以外にも横浜が発祥であったのか、と再確認させられる章がある。医学の周辺分野として西洋歯科医学の発祥の地であることや、歯科医第一号の小幡英之助について語られている。また公衆便所や製氷、石鹼製造のはじまりなどについても興味深い。医史学的事象とその時代背景が重なって、より幕末から明治にかけての横浜という場所が鮮明に浮かび上がる。

また、本書を読み進む中で著者の意見に深くうなずいた点がある。横浜に近い東京には東京大学があり、お雇い教師が医学の教鞭を執り医療活動を担っていた。一方、横浜では民間の宣教医師またはどこにも所属しない来日外国人医師たちが居留地内で活動をしていたのである。

このような民間の来日外国人医師たちの活動に光をあてた著者の記述は見事である。お雇い外国人教師たちの経歴等は公文書として現在も遺されているが、ヘボンをはじめとした民間の来日外国人医師たちの経歴や活動については断片的でしかない。著者の長年にわたる調査研究によって、こうした人々の活動が明らかにされたことは非常に大切なことであると言える。

著者が本書に『日本近代医学の^{あけぼの}黎明——横浜医療事始め——』と題名を付けた意図がはっきりとした、医史学に属する立場に限らず一般の人々にも日本における近代医学のはじめについて知ることのできる一冊である。

(高安 伸子)

[中央公論新社、〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7, TEL. 03(3563)1261, 2011年3月, 四六判, 248頁, 1,800円+税]